

## 平成六年度 特別研修員研究発表要旨

## 一 乗 海

— 善導の人間観 —

## 調 晋 一

善導は、『観経疏』冒頭の勸衆偈で「我依菩薩藏頓教一乘海」(玄義分)と表白している。それは、遇教における決断、回心の表明である。と同時に、仏滅後の末法五濁に、われらの行証道として現成する浄土の教法の事実表現にはかならない。つづいて「説偈帰三宝与仏心相應」(同上)と敬白する。「我菩薩藏頓教一乘海に依りて」とは、「偈を説きて三宝に帰す、仏心と相應せり」と言い切れる根拠であり、そう言い切る帰依三宝人、誕生の表白である。遇教の事実、それが「今乗二尊教広開浄土門」(同上)の一事に尽くされる「楷定古今」(散善義)という教学営為の基点である。善導は、「一乘海」の具体性を「乗彼願力」という一点において、「五乗齊入」(玄義分)「謗法闍提回心皆往」(法事讚)と明言している。その「一乘海」について、弘願の一乗が開顕する人間観、遇縁存在としてある凡夫という視点から尋ねていくことにする。

『観経』三心の教言に、善導は「一心に唯仏語を信じて」「決定して行に依りて」(仏教・仏意・仏願に随順する存在、「是れを真の仏弟子と名づく」(散善義)と聞き取った。それが「深信すべし、深信せよ」と呼び覚ます、「大経に説くが如き」(玄義分)

弘願に深信された仏弟子観であり、ほかならぬ深信する自身である。一言すれば、深信とはいわゆる機法二種深信、決定して自身の乗彼願力の事実を深く信じ知ったという目覚め、本願における自身の深信知である。一乗を究竟する大悲弘願は、人間における一切の諸属性を選ぶことなく、また人間の諸属性にかかわる諸関心を破って、大願業力に乗する一人として人間を根源的に覚醒する。善導は、その覚醒された自身の現事実に立って、弘願の一乗が開顕する人間観を公開していく。それが、玄義分第六経論和会門で主題的に取り上げられた凡夫という人間観である。その課題は、「観経の定善及び三輩上下の文の意を見る」(同上)ことにおいて領受された「観経」の対告衆の決定である。すなわち、仏言が明らかにする人間存在の決定である。そのため、古今の諸師が他生観と位置付け、教理的整合性をともに規定する九品解釈は、仏説において徹底して批判されていく。論及の主軸は、『観経』は「定んで凡夫の為ににして聖人の為にせず」(同上)ということにある。それは、人間が常に保持する相対的な優劣意識で、高位な大乘の菩薩や小乗の聖者に対すれば、低位な凡夫の為にといっているのではない。また同じ意識で、実際には聖人など存在せず、全て凡夫であると量的な意味で主張しているのでもない。善導は、「上聖・小聖」(同上)の勝徳・功力等を諸經典によって具体的に明示し、そのような聖人が「更に何の事を憂えてか乃ち韋提に籍りて其れが為に仏を請して、安樂国に生れんことを求めんや。斯の文を以て証するに、諸師の所説豈に錯りに非ずや」(同上)と道理をもって確認している。この「定為凡夫」とは、諸仏の悲心が偏えに愍念する急に須く救うべき「苦ある者」、常に苦悩の生死海に埋没し流転する「常没の衆生」(水に溺れる

人(同上)の為にということである。「観経」は、定めて「五濁五苦八苦等、六道に通じて受く、未だ無き者有らず、これを逼悩す。もし此の苦を受けざる者は、即ち凡数の撰に非ず」(序分義)と語られる凡夫の為に教説されるのである。「不為聖人」とは、身は煩惱海にあつてもそれに染まることのない功德・力用をもつ「岸上の者」(玄義分)、あるいは脱自的な立場で衆生海を傍観する「岸上の者」の為に説かれてはいないということ。言え、そういう「凡数の撰に非」ざる「岸上の者」を問題とはしない。王舎城の悲劇を序分とする「観経」は、仏言に「汝は是れ凡夫なり」(観経)と教勸される凡夫、凡夫ということを存在の課題とすべき者の為に説かれるのである。そこにおいて、「あなたは大小の聖人か、それとも単なる岸上の傍観者か」という突き付けがある。その視座は、自意識の有無を超えて衆生海に無縁な傍観者など存在しないという認識と、人間に人間を教える「観経」は、苦悩の衆生海を具体的に生死する「凡数の撰」にしか聞き聞かれないという領きである。「観経」の対告衆は、実業の凡夫韋提希及び未來世の一切衆生、善導の表現でいえば「韋提等」(玄義分)である。今回は割愛するが、善導はこの「定為凡夫・不為聖人」ということを、事実の業縁に苦悩する韋提希の上に「是凡非聖」(序分義)ということを押さえ切っていく。と同時に、「汝は是れ凡夫なり」と教勸される人間は、まさに凡夫を自身の課題とすべき存在であることを、別選する実業の凡夫、韋提希に確認している。

善導は、「観経」の対告衆とは総じて仏滅後の五濁の凡夫であり、遇縁を自己の内実として生死する存在と領受する。そして九品とは、遇縁の相違による差異であつて、人間の階層的な序列化

などではないとする。遇大・遇小・遇悪、千差万別の諸縁の差異は差異として、人間は遇縁存在としてある凡夫として平等である。その一切の善悪の凡夫が、平等に「信を生じて疑い無ければ、仏の願力に乗じて悉く生ることを得」(玄義分)べき存在である。このように言及する善導の志願は、「今の時の善悪の凡夫をして同じく九品に沾さしめんと欲す」(同上)ということにある。だから諸師が、「仏法と世俗との二種の善根有ること無し、唯悪を作すことを知れり」という下輩について、教理的な予定観念で「始学大乘人」と規定し、往生を容認するような見解は「もし此の見を作さば自ら失し他を悞またむ。害を為すこと茲れ甚だし」(同上)と痛烈に批判する。なぜなら、「但此の如きの悪人、目に触るるに皆是れなり」(同上)という、遇悪をいきる人間の存在現実を抽象化し、弘願一乗の救済事実を歪曲する「見」だからである。善導は、五濁の中「見濁と言うは、自身の衆悪は総べて変じて善と為す、他の上に非無きを見て是にあらずと為す」(序分義)と述べている。このような「見」は、理解や立場の相違を超えて、仏教のある特定な人の特定な関心事へと変質させ、それだけにとどまらず人間を明らかにする仏教を阻害する作用としてはたらく。その事に対する善導の厳格な批判である。

あらゆる生き様をもって生きる人間が、その生き様の装いに拘わりなく、自身の乗彼願力の事実を覚醒され、遇縁存在としてある凡夫という人間観を賜る。「一乗海」とは、そういう「弥陀智願海」(往生礼讚)の力用の事実表現だと考えられる。そして何よりも、「楷定古今」を自身の歴史的使命とする仏弟子を生み出す事実であるといえよう。